

「
愛の
景色
」

○ 登場人物

島崎 蓮真 (75) 天才ピアニスト

(10)

島崎 ゆかり (75) 蓮真の妻

(10)

小鳥遊 洋一 (25) 蓮真の弟子

桐沢 彩音 (17) 蓮真の弟子

中原牧人 (59) 記者

ホステス A

ホステス B

女子学生 A

女子学生 B

女子

司会者

配達員

スタッフ

その他

○道（夜）

繁華街。賑わう大通りには人が行き交っている。その中を焦りの表情で走っている小鳥遊洋一（25）。

洋一、歩行者とぶつかってよろける。

歩行者、不機嫌な顔。

洋一「すみませんっ！」

洋一、お辞儀をして謝り、再び走る。

○キャバクラ・店内（夜）

豪華な内装のキャバクラ。客と従業員で賑わっている。

○同・個室（夜）

VIP用の個室。半円状のソファの真ん中に座っている島崎蓮真（75）。両脇には綺麗なドレスを着たホステス二人が座っている。

蓮真、香りを楽しみながらコーヒー飲んでる。

ホステスA「こちらは先生のために取り寄せたエチオピア産のものですよ」

蓮真「ああ、良い香りだな」

ホステスBが不思議そうに蓮真を見つめて

ホステスB「メニューにないコーヒー頼むなんて、お客様って何者なんですかあ？」

ホステスAの顔が引きつる。

蓮真、愉快的顔で

蓮真「世界のハスマもまだだってことだな」

ホステスB「世界のハスマ？」

蓮真「次はクラシック曲より、流行りの曲を弾いたほうがいいか。お姉さんは、ピアノ好きかい？」

ホステスB「すごい。ピアニストさんなんですか。あ、でもピアノノって聞いていると眠くなっちゃいますよねえ」

蓮真、コーヒーを飲む手を止める。

ホステスA「申し訳ありません、島崎さま。

失礼なことを申し上げ——」

蓮真、手で言葉を遮って、人差し指を立てる。

蓮真「今日の店の客全員にいつものボトルを一本ずつ」

蓮真、笑ってみせる。

ホステスA「いつもありがとうございます」

ホステスB「かつこよー」

そこへ洋一がやってくる。

洋一「先生っ！」

ホステスB「うわっ、ピアニストの小鳥遊洋一！」

ホステスA、恐縮な顔で苦笑する。

蓮真「やれやれ。若いイケメンには勝てねえや。どうした？ 洋一」

洋一、息切れをしながら

洋一「すぐに、帰りましょう」

蓮真「あん？」

洋一「……ゆかりさんが」

洋一、泣きそうな顔。

蓮真、眉間に皺を寄せて首を傾げる。

○島崎邸前（朝）

T・1ヶ月前

近代的な造りの大きな住宅。門扉の前には高級車が停車している。

玄関から出てくる蓮真と洋一。洋一は大きなスーツケースを引いている。

後からエプロンをつけた島崎ゆかり（75）と金髪で制服姿の桐沢彩音（17）が出てくる。

洋一「じゃあ行ってきます。ゆかりさん」

ゆかり「必要なもの全部入れてあるから。あと、本番1時間前はこいつにコーヒー飲ますなよ。前立腺がボロくなってる」

蓮真「うるせえな」

洋一、笑いながら

洋一「はい、任せてください」

彩音「絶対、私の方が役に立つのに」

洋一「は？ 料理も片付けもできないズボラなガキに先生の世話ができるかよ」

彩音「はあ？ 料理できます、お好み焼きな

ら誰にも負けません！」

睨み合う、洋一と彩音。

蓮真「うるせえ、喧嘩すんな、ガキども」

蓮真とゆかり、顔を合わせて

蓮真「じゃあな」

ゆかり「ああ、いってらっしゃい」

蓮真、頷いて車に乗る。

洋一、彩音と睨み合いながらも、ゆかりに綺麗にお辞儀をしてから蓮真に続く。車が発進する。

ゆかり、遠ざかる車を満足そうに見つめる。

彩音、ゆかりを心配そうに見つめて

彩音「ねえ、ゆかりさん。本当にいいの？

もしかしたら」

ゆかり「いいの」

彩音、俯く。

ゆかり、彩音の頭を撫でて片手で抱きしめる。

○創葉病院・霊安室

部屋の中央にはベッド型の安置台で横たわるゆかりの姿。安置台の脇には椅子に座っている蓮真と医師が立っている。

医師「進行ガンでした。ご本人の希望で家族への告知はしないようにと」

蓮真、懷から煙草を取り出して啜える。

医師「島崎さん。ここで煙草は」

蓮真、構わず、ジッポライターで火をつける。

蓮真「悪いな、先生。なんか言ったか？」

医師「……いえ」

医師、一礼して部屋を出て行く。

○同・霊安室前

壁に寄りかかって立っている洋一と彩音。医師が部屋から出てくる。

洋一、礼儀正しく頭を下げるが彩音は俯いたまま。

医師が去ったあとで

洋一「なんで黙ってたんだよ。知ってたんだよな？」

彩音「……」

洋一、彩音の胸ぐらを掴む。

彩音、泣き腫らした顔で洋一を強く睨みつける。

洋一と彩音、睨み合うも洋一が手を離す。

洋一「……悪い」

洋一、悔しそうな顔で霊安室に入る。

彩音、しゃがみ込んで顔を伏せる。

○同・霊安室

入ってくる洋一。

洋一「……先生」

蓮真、煙草を啜えながらゆかりを見つめている。煙草の灰は長く今にも落ちそうになっている。

洋一、懷から携帯灰皿を取り出して灰

が落ちないように蓮真の口から煙草
を取る。

洋一「先生、大丈夫ですか？」

蓮真「バカだよな」

洋一「え？」

蓮真「こいつは、俺より先に死ぬべきじゃな
かった。バカな女だよ」

蓮真、立ち上がり部屋を出て行く。

洋一、蓮真を心配げに見送る。

タイトル「愛の景色」

○島崎邸前（夕）

小雨が降るなか、傘をさしてやってく
る彩音。

逆側からやってくる洋一。

洋一「お前、今日レスンじゃないだろ」

彩音、そっぽを向いて無視をする。

洋一、面倒そうな顔で

洋一「病院では悪かったって。謝ってんだろ」

彩音「……」

洋一「ずっとそばにいるのも、辛かったよな」

彩音、洋一を一瞥してから島崎邸の外

観を見つめて

彩音「先生、心配で見にきた」

洋一「俺も三日近く会えてない。葬儀の時も

話せる雰囲気じゃなかったしな」

彩音「ボケてたりして」

洋一「やめろよ、リアルだな」

洋一、門扉に手をかけて止める。

洋一「なあ。なんで、ゆかりさんは黙ってた

んだ、病気のこと」

彩音「……」

洋一「ツアー中でも顔見に来ることは出来た

んだ。サヨナラくらい、はさ」

彩音「それ、言える人いる？」

洋一「え？」

彩音「私は言えなかった。一番そばにいたけ

ど、言えなかったよ。一秒でも長く生き

ててほしかったから。それ言ったら、諦

めた気がするじゃん」

洋一「そうか……そうだな」

彩音「先生の仕事、穴開けて大丈夫なわけ？」

洋一「ツアー終わったあとだったからな。取材関係しかなかったし、全部断ったよ」

彩音「ふーん。そういうタイミング、見計らったみたい」

洋一「ゆかりさんなら、あり得るな」

苦笑する、洋一と彩音。

ピザ配達のバイクがやってくる。

配達員、洋一たちに一礼しながらイン

ターホンを鳴らそうとする。

洋一「あの、うちにですか？」

配達員「あ、はい。島崎さまからのご注文で

すけど」

彩音、怪訝な顔。

彩音「先生が、ピザ？」

洋一「俺が払います。いくらですか？」

○同・リビング（夕）

手にピザを持ってやってくる洋一と彩音。

ジャズピアノの音楽に合わせて室内中央で優雅に踊っている蓮真。ダイニングテーブルには食べかけの寿司があり、椅子には中原牧人（59）が座っている。

中原「やあ、二人とも」

洋一「あれ、中原さん。取材は後日にと」

中原「うん、聞いたよ。だから今日は友人としてね。ごめんね、昼もご馳走になっちゃった」

蓮真「お、ピザ来たぞお」

蓮真、軽やかなステップで洋一からピザを受け取る。

彩音、心底呆れた顔で

彩音「先生、なにやってんの？」

蓮真「何ってお前、アレはダメ、コレはダメって言ってたうるせえ奴がいなくなっただぞ。俺は食いたいものを食う！ 夜

更かしだつてし放題だ。ひゃっほーい」

彩音、苛つく顔。

洋一、がっくりとため息をつく。

○同（夜）

テーブルの上には空になった寿司の桶やピザの箱。

蓮真、満足そうに楊枝を使っている。

彩音、不満げに蓮真を見ている。

洋一、テーブルを片付けながら

洋一「食後のコーヒー入れましょうか」

中原「手伝うよ」

洋一と中原、キッチンへと向かう。

彩音、蓮真と二人になったところで

彩音「先生、私のこと怒らないの？」

蓮真「あ？」

彩音「ゆかりさんが危篤になったとき、ううん、もっと早く先生を呼ぶことも出来た。

でも」

蓮真「ゆかりがそうしろって言ったんだろ。

お前にそんな気遣いなんてあいつは求めてねえよ。俺は出来るとも思ってたねえ」

彩音「……ムカつく」

彩音、俯きながら

彩音「なんとも思わないわけ？」

蓮真「何が？」

彩音「だって結婚してもうすぐ五十年だって、お祝いしようって言ってたのに、こんな別れ方ってないよ」

蓮真「バーカ。俺たちはそんなセンチメンタルじゃねえよ。半世紀暮らしててもわからないことばかりだった。結局あいつは、俺の演奏一度も聞きに来なかったしな。世界のハスマの嫁のくせによ」

彩音、複雑な顔で黙る。

中原、砂糖とミルクの入った瓶を持って戻ってくる。

中原「一度もですか？ 意外ですね」

蓮真「俺のデビュー公演ですら来なかった女だ。ありゃ、サッチャーか土井たか子の

生き霊か亡霊が乗り移ってたんだろうよ」

中原「ははっ。世界のハスマが唯一頭の上がない人でしたからね」

蓮真「違う。俺が立ててやってたんだ」

中原「そういうことにしておきましょうか」

蓮真、気に入らない顔。

蓮真「まっ、そういう淡泊な女だったんだよ。元々、見合いみたいなものだったし、他に好きな男がいたのかもな」

彩音「（大声で）そんなことない！」

シンとする室内。

蓮真、呆れたように彩音の頭を小突く。

蓮真「くだらねえこと考えてないで、練習してんだろうな。明後日、毎コンの本戦だろ。こんなところでこけるんじゃないぞ」

彩音「わかってる。今日泊まるから、ピアノ貸して」

彩音、ドタドタと出て行く。

戻ってきた洋一、うんざりした顔で

彩音を眼で追う。

洋一「ホントに、落ち着きがないなー」

中原「ついに彩音ちゃんも毎コン挑戦ですね。

洋一君が優勝した年からもう七年か」

洋一「うわぁ、もうそんなになりますか」

中原「今やNHKフィルとの公演ツアーや単
独リサイタルもこなす新進気鋭のイケメ
ンピアニスト。たしいものだ」

洋一「やめてくださいよ。まだまだ先生には
足下にも及ばない」

蓮真「当たり前だ、アホ。慢心は俺を超えた
あとで許してやるよ」

洋一、肩を竦める。

中原「師が偉大過ぎるのも考えものですね。

彩音ちゃんはどうなんですか？」

蓮真「あいつはなぁ、技術は確かなんだが、

猫みたいなムラツ毛メンタルだよ。最近

はようやく安定してきたところだ」

中原「そこはゆかりさんのケアのおかげです
かね。彩音ちゃんにとっては母親も同然
だったはず。本番、大丈夫でしょうか」

洋一「それは心配ないですよ。ねえ先生」

蓮真「ああ。俺たち演奏家は何があらうと真摯に向き合わなきゃいけないえ。ピアノと客と自分自身。ここでぶれるようなら、あいつもそこまだったってことだ」

中原「演奏家、ですか。凡人の私から見ると十代の女の子には酷に思えますがね」

蓮真「おいおい。あいつは俺の弟子だぞ？」

蓮真、不敵に笑う。

中原「失礼。ごもつともだ。月末には洋一くんの念願だった紀尾井ホールでのリサイタルもありますし、指導者としても天才ですよ、あなたは」

蓮真、満悦の顔で頷く。

洋一「あのさっきの話ですけど、ゆかりさん、本当に先生のコンサート観に来たことないんですか？」

中原「それね。僕も引っかけた」

蓮真「ああ？」

○（イメージ）コンサートホール

舞台上でピアノを弾いている蓮真。

中原の声「豪快にて繊細。気品の中にある人を魅了する色気。クラシック界の至宝、島崎蓮真のピアノは老若男女に愛されてきた。その一番近くにいた彼女が、舞台上のあなたを観ていないというのは」

○元の島崎邸・リビング（夜）

話している、蓮真、洋一、中原。

中原「どういう心理だったのでしょね。すべての公演は五秒以内で完売するプレミアチケットですよ。音楽に教養があるものなら誰だって生演奏を聴きたいはず。余命宣告されていたのなら、最後に、なんて考えてもおかしくはないのですが」

蓮真「はっ。それだけ俺たちに愛がなかったってことだろ。子どもがいない後期高齢者夫婦には珍しいことじゃねえさ」

怪訝に顔を見合わせる洋一と中原。

中原「あのゆかりさんが、ねえ」

洋一「意外です。俺は大体先生のそばにいたから、聞きに来ているのだとばかり。こっさり来てたんじゃないですか？」

蓮真「それはない。毎回スタッフに確認させてたからな」

洋一「いつの間に」

中原「世界のハスマも、妻に自分のピアノを聴いてもらえないのは悲しいと。しつかり記事にさせていただきますよ」

蓮真「お前……それやったら、業界から殺してやるからな」

中原「おー、冗談には聞こえない」

コーヒーメーカーの電子音が鳴り、洋一がキッチンへ向かう。

○同・キッチン（夜）

洋一、口に手を当てて考えながらコーヒーをカップに注いでいる。

洋一「ゆかりさん、あんなに先生のピアノ好

きだったのに……」

蓮真の声「洋一、コーヒーまだか？」

洋一「はい、すぐにっ！」

洋一、急いでコーヒーを持っていく。

○同・レッスン室（夜）

防音完備の部屋。中央のグラウンドピア
ノを一人、弾いている彩音。その表
情は険しい。

○（回想）創業病院・個室

ベッドで寝ているゆかりとベッド脇に
座っている彩音。

彩音「ねえゆかりさん。先生に連絡しよ？
本当にこのままじゃ」

ゆかり、弱々しく首を振る。

彩音「なんでよ。こんなの」

ゆかり「ごめんな。これは私のワガママなん
だ。もしかしたら、お前達にも見せてあ
げられるかもしれない」

彩音「……何を？」

ゆかり、彩音の頭を撫でて

ゆかり「私の好きだった、世界のハスマジ

やない、島崎蓮真のピアノをさ」

ゆかり、優しく微笑む。

○元の島崎邸・レッスン室（夜）

彩音、息を切らして演奏を中途半端に
終える。

彩音「意味わかんないよ、ゆかりさん」

○同・別のレッスン室（夜）

ピアノを弾いている洋一と指導してい
る蓮真。

蓮真「よし、こんなもんだろ」

洋一「ありがとうございました」

蓮真、微かに隣りから聞こえる彩音の
演奏に耳を傾ける。

洋一「あいつ、ぶっ続けで弾いてますね」

蓮真「お前と違って危なかったしーガキだ。つ

「か、お前もうデビューしてんだから、俺の指導要らねえだろ」

洋一「いえ、まだまだ学ばせていただきます。マネージャーも続けますからね。先生のピアノ、特等席で聞けますし」

蓮真、呆れた顔で

蓮真「俺は寝るぞ。気が向いたら彩音のバカ、ちよつと面倒見てやれ」

洋一「先生が行けば喜ぶのに」

蓮真「全国出場、決めたらな」

洋一「厳しいですね」

蓮真、洋一をジッと見つめて

蓮真「お前は、大丈夫なのか？」

洋一、一瞬沈黙するも笑って

洋一「……ええ、問題ないです」

蓮真、洋一の肩を軽く叩いてから部屋を出て行く。

洋一、壁に貼ってある自分のリサイタルのポスターを一瞥する。

○（回想）同

ゆかりが洋一のリサイタルのポスターを貼っている。その後ろで恥ずかしそうにしている洋一。

洋一「ゆかりさん、貼らなくてもいいよ」

ゆかり「バカ、謙遜すんな。紀尾井ホールは蓮真がショパンコンクールあとで凱旋コンサートした場所だぞ。お前の念願だったじゃんか」

洋一「そうだけど。恐れ多さもまだあるというか」

ゆかり、大袈裟にため息をついてから洋一の頭をぐりぐりと撫でる。

ゆかり「もつと楽しみなよ、洋一。自分が楽しまなきゃ、音で人を楽しませるなんて無理なんだぜ」

ゆかり、笑ってみせる。

○元の島崎邸・レッスン室（夜）

ポスターの前に立っている洋一。両目

を片手で覆い、天井を見上げる。

洋一「大丈夫、大丈夫……」

洋一、拳を強く握りしめている。両目を覆った片手から涙が漏れている。

洋一「大丈夫」

○同・廊下（夜）

レッスン室のドア窓から中の様子を見ている彩音。室内では洋一がポスターの前で目を覆っている。

彩音「……」

彩音、強ばった顔でその場を後にする。

○島崎邸

昼の日差しが住宅を照らしている。

○島崎邸・キッチン

寝間着姿であくびをしながら入ってくる蓮真。

全自動のコーヒーマーカーにスイッチ

入れて煙草を取り出す。

蓮真「どこで吸ってもー、怒られなーい」

蓮真、ジッポライターで火をつけようと
するが、なかなかつかない。

蓮真「オイル切れか？　おい、ゆかり、オイルが切れ……」

蓮真、キッチンからガラんとした誰も
いないリビングを見渡す。頭を掻き
ながら時計を一瞥する蓮真。時刻は
十二時過ぎ。

蓮真「もう終わった頃か」

蓮真、ライターオイルを探し始める

○都築音楽ホール・外観

大きな区民ホール

○同・ホワイエ

結果待ちの学生が多くいるなか、一人
で隅に立っている彩音。

彩音から少し離れたところで女子学生

二人組の話し声。

女子学生A「あの人、島崎蓮真の二番弟子？」

女子学生B「うん、演奏聞いた。超上手かつ

たけど、見た目派手だよねえ」

彩音、ぎろりと女子学生二人を睨む。

女子学生二人、逃げるように去って

行く。

彩音、不機嫌な顔で舌打ちをする。

洋一、無言で彩音の隣にやってくる。

彩音、洋一に気付いてギョツとして

彩音「うわ、なんでいんの？」

洋一「演奏聞いた。良かったよ」

彩音「……どうも。嫌味にしか聞こえないけ

ど」

沈黙する、彩音と洋一。

洋一「あのさ。ゆかりさん、先生の演奏聴き

に来たことないって知ってたか？」

彩音「……」

洋一「おかしいだろ。先生の前じゃ出さなかつたけど、ゆかりさんは先生の一番のフ

アンだったはずだ」

彩音「……別に、演奏聴きに行くことが全てじゃないじゃん。悪く捉えすぎ。そのくそ真面目、あんたの悪いところだよ」

洋一、言い返そうとしてやめて

洋一「そうだな。考え過ぎならそれでいいけど。ただ、怖くなってるさ」

彩音「怖い？」

洋一「ゆかりさんっていつも笑ってたじゃないか。だから、勝手に悩みなんてないって決めつけてたんだ。もしも、一人で誰にも言えず何かで苦しんだとかだったら、自分を殺したくなってるな」

彩音「……そんなんじゃない」

洋一「え？」

彩音「ゆかりさんは悩んでなんかなかった。

先生のこと大好きだったし」

洋一「だったら、なんで先生の演奏聴きにきてないんだよ。あの人の性格からしておかしいだろ。推しのバンドの曲、CDで

聞くのつまらないからって野外フェスに
一人で行くような人だぞ」

彩音「ゆかりさんが好きだったのは、世界の
ハスマのピアノじゃなかったんだよ」

洋一「なんだ、それ」

彩音「さあ。島崎蓮真のピアノが好きだった
って言ってた。どっちも好きだけど、本
当に好きなのはって言い方だった、かな。
最後も……それを私たちに聞かせたいあ
げたいって」

洋一「どういう違いだよ。わからん」

彩音「私も。今はゆかりさんがいなくなった
こと簡単に割り切ってる先生の方が、私
にはわからないし苦手。大人の男と女っ
てそういうもん？」

洋一「人によるだろ。でも大人になるほど、
本音っていうのは沈むからな。素直には
なれないんだよ。子どものお前と違って」
彩音「うつぎ。っかあんだ、今これを話し
にここ来たわけ？　　どういう神経してん

のよ。落ちてたら私終わりなんだけど」

洋一「お、来たぞ」

審査員がやってくる。

審査員「結果発表をします。名前を呼ばれた方はこちらに。結果と講評が書かれた用紙をお渡しします」

彩音、緊張した面持ちで拳をぎゅっと握る。

洋一、彩音の頭を叩く。

彩音「痛っ」

洋一「もっと音楽、楽しめよ」

審査員「次、桐沢彩音さん」

彩音、審査員の元へ行く。

審査員から用紙を受け取る彩音。

彩音、意を決して見ると全国大会進出の文字を見て、ホッとする。

彩音、洋一の方を見るもすでに洋一は帰っている。

彩音「……かっこつけやがって」

○島崎邸・リビング

空き巢が入ったように散らかっている
リビング。蓮真が疲れ切った顔でソ
ファーに座っている。

蓮真「くそ、どこにもねえ」

蓮真、ジッポライターを見つめて

蓮真「オイルが切れたことなんて、一度もな
かったのにな」

蓮真、立ち上がる。

○同・和室

立派な仏壇の前に座る、蓮真。

仏壇には、ゆかりの写真と骨壺の入
った綺麗な箱が飾られている。

蓮真「俺は何にも知らねえんだな。お前が考
えてたこともさっぱりだ」

蓮真、ゆかりの写真を指で小突く。

蓮真「なあゆかり。俺の音楽は、お前にとつ
てどうでもいいものだったか？」

蓮真、ゆかりの写真はジッと見つめて

から自嘲的に笑う。

蓮真「はっ。俺らしくねえな」

電話が鳴り、立ち上がる蓮真。

○同・リビング

散乱した物に足を取られながら、電話を取る蓮真。

蓮真「はい。オイル」

中原の声「え？ オイル？」

蓮真「なんだ、中原か。ちょうどいい、何か火つけるもの持ってきてくれ。オール電化なんかにするんじゃないかってぜ」

中原の声「構いませんよ、お伺いしようと思ってたので。彩音ちゃん、東京代表決定、良かったですね」

蓮真「おお、そりやなにより」

○出版社・雑誌編集部

デスクの前で座っている中原が電話をしている。

中原「あれ、ご存じなかったんですか。しまったな、ついさっきのことですから、直接伝えるつもりだったのかも」

蓮真の声「知らんフリするよ。それでなんか用か？」

中原「実は面白い仕事が回せそうなんです」
中原が持っている企画書を見る。

企画書には「世界のハスマによる次世代育成計画」のタイトル。

○麻生区民小ホール

中央にはグランドピアノが置かれ、舞台上に立っている蓮真と司会者。小学生十名ほどとその保護者が集まっております、NHKのテレビクルーが撮影している。

ホールの端で見守っている洋一と中原。
司会者「生中継でお送りしております。未来に繋げろ、日本育成計画！今日は特別企画です。なんとなんと、シヨパンピア

ノ国際コンクールで日本人初の一位。エリザベード王妃国際音楽コンクールで二位を入賞しております世界で一番有名な日本人ピアニスト、島崎蓮真さんにお越し頂きました」

拍手が巻き起こる。

蓮真、寡黙な表情のまま。

○南野川高校・教室

生徒で賑わうなか、スマホで番組の生中継を見ている彩音。

○麻生区民小ホール

舞台上、番組進行している司会者とその隣りに立っている蓮真。

司会者「本日は一人一人に好きな曲を弾いてもらい、先生に評価、指導をしていただきます。ピアニストの皆さん必見ですよ、よろしく願います、島崎先生」

蓮真、頷くのみ。

ハラハラした顔で見守っている洋一。

○（回想）島崎邸・リビング（夜）

リビングで話している蓮真と中原。テーブルで好み焼きを作っている彩音とリビングを片付けている洋一。

蓮真「テレビだあ？」

中原「ええ。私の知り合いがディレクターをしてるんですが、トラブルがあつて番組に穴が空きそうだと泣きつかれてね。そこで演奏者ではなく指導者としての世界のハスマにスポットを当ててはどうか、と提案しました」

彩音「その前にさ、全国出場祝われる側の私にがなんでメシ作ってるのか謎なんだけど」
洋一「当番制にしたのお前だろ。どんな番組なんですか？」

中原「未来に繋げろ、日本育成計画！　というレギュラー番組なんだけどね」

彩音「うわ、つまんなそー」

中原「ピアニストを目指している小学生を集めて、先生の公開レッスンをするっていうね」

洋一「公開っていうと、もしかして」

中原「生放送だよ」

洋一&彩音「絶対無理」

中原「そうかな、面白くない？」

洋一「中原さん知らないんですよ。先生、怒鳴る殴るは当たり前なんですから」

彩音「炎上が約束されすぎてる。逆に見たいかも」

蓮真「舐められたもんだな。弟子でもないのにそんな厳しくしねえよ」

洋一「いやいや、先生に指導の線引きなんて無理ですって」

蓮真「気に入らねえ。よし決めた。受ける」

洋一「ええ……」

彩音「私、知らない」

彩音、お好み焼きを華麗にひっくり返す。

○元の麻生区民小ホール

舞台では、蓮見が一人目の小学生を指導している。

その様子を不安そうに見ている洋一と
余裕のある顔の中原。

洋一「……胃が痛い。早く終わってくれ」

中原「うまくやるさ。それに、先生も今は何かしていた方がいいんじゃないかな」

洋一「だから、この仕事を？」

中原「たまたまだよ」

○同・舞台上

二人目の女子がピアノ椅子に座る。

蓮真「じゃあ、まずは弾いてみる」

女子、キラキラ星を力強いタッチで弾き始める。

ハッとすると、蓮真。

○（フラッシュ）学校

木造の古い音楽室でピアノを弾いてい

る蓮真（10）と蓮真と背中合わせに座って聞いているゆかり（10）。

○元の麻生区民小ホール

女子が曲を弾き終わり、周りから注目を集めていることに気付く蓮真。

蓮真「……誰を思って、ピアノを弾いた？」

女子、首を傾げながら

女子「ママ、です」

蓮真「ママね」

蓮真、女子の肩を人差し指で突く。等間隔で何度も突く。周りがザワつく。

女子「い、痛い」

蓮真、突くのをやめる。

蓮真「そう、痛いよな。お前は今これと同じことをピアノにしていた。意味わかるか」

女子、首を振る。

蓮真「即答かよ。最近のガキは考えることをしねえな……いいか、楽器は代弁者だ。

お前がどんなに思いを持って弾いても雑

に扱ったら届かない。死ぬ気でやりや誰でも上手くなるんだよ。伝えたいものがあるなら、技術の先を見ろ」

女子「先生は、どうしてピアノ弾くの？」

蓮真「俺の音楽を求める人がいるからだ、その全員のために弾いている」

蓮真、ピアノを一瞥して

蓮真「求める人全員、にな」

蓮真、ため息をついてから女子の隣りに座る。

蓮真「連弾してやる。優しく柔らかく、相手に響かせるようにイメージしろ。いくぞ」

女子、笑って弾き始める。蓮真と女子の連弾によるキラキラ星。

蓮真、憂鬱な顔でピアノを弾いている。

○同

誰もいないホールの舞台でピアノ椅子に座っている蓮真。

舞台袖からやってくる洋一と中原。

中原「先生、お疲れ様です」

蓮真、鍵盤を見つめている。

洋一「先生？」

蓮真「洋一。俺、ピアノやめるわ」

洋一「そうですか。なら……って、えっっ！

な、な、何言ってるんですかつ？」

蓮真「もう決めた」

洋一、言葉を失って口をパクパクして
いる。

中原、楽しげな顔で

中原「理由を聞いても？」

蓮真「引き際だと思ったただけだ」

中原「ゆかりさんと関係が？」

蓮真「ばーか、関係ねえよ」

彩音の声「なにそれ？」

客席の方から歩いてくる、彩音。

彩音「そんな意味わかんない理由でやめない
でよ」

蓮真「うるせーな。俺の勝手だろ。もう決めた、やめる」

彩音「急に引退とかファンに超失礼でしょ。
そういう不義理するんだ。私たちには聴
きにくる客のこと考えろとか言ってたく
せに」

押し黙る、蓮真、

彩音、舞台に上がって

彩音「どうせやめるなら、ゆかりさんに胸張
ってやめてよ」

蓮真「だから、ゆかりは関係ねえっつーの」

彩音「……ゆかりさん、先生のピアノ好きだ
ったよ、誰よりも。でも本当に好きだっ
たのは今の先生のピアノじゃなかった」

蓮真「ああ？　どういう意味だ？」

彩音「私が知るわけないじゃん。でもそう言
ってた。ゆかりさんには、本当に聞きた
い先生のピアノがあっただんじやないの？」
蓮真「意味がわからん」

彩音「ならそれ見つけてよ。引退するってい
うなら最後に、ゆかりさんの好きな先生
の演奏を聞かせて。ゆかりさんにも、聞

かせてあげたい」

蓮真「……そんなこと言われてもな」

彩音「引退リサیتالすればいい。自分と向

き合うには、本番が一番でしょ」

蓮真「生意気な口を……なら納骨までにだ。

それ以降はやらん。すぐに引退だ」

彩音「せっかちじじい」

蓮真「おい、聞こえてるぞ」

洋一、ハッと我を取り戻して

洋一「四十九日までつてことですか。無理で

すよ、先生。会場が押さえられません」

中原「そうだねえ、島崎蓮真の名前に見合う

会場となると、限られてくるからなあ」

蓮真「なら話はおしまいだな」

彩音「先生っ！」

洋一、思案して

洋一「ゆかりさんのため、なんですネ」

蓮真、何も言わずに顔を逸らす。

洋一「……わかりました。なら、月末の土曜

日にしましょう。紀尾井ホールです」

蓮真「おい。本気で言ってるのか？」

洋一「冗談で言いませんよ、こんなこと」

蓮真、洋一に歩み寄り、胸ぐらを掴む。

蓮真「お前のファンがチケットを買ったんだぞ。そのステージで俺が弾けてるか？」

洋一「手を怪我したことにして、先生が代わりに弾く。端から見れば弟子の不手際をカバーする美談になります」

蓮真、怒り顔で洋一を突き倒す。

蓮真「興ざめだな。破門だ、馬鹿野郎」

洋一、勢いよく立ち上がって

洋一「俺にとってもゆかりさんは母親だったんですよっ！　大丈夫なわけないじゃないですか。話したいことがたくさんあったんだ！　あの人のために何かするのなら、俺だって何かしたいんですよ！」

中原「僕はアリだと思いますよ。彼にはリスクを背負うだけの理由があるってことだ。それは、先生も同じなんでしょう」

蓮真「若いやつと俺を一緒にすんじゃねえ。」

客を舐めすぎだ」

彩音「なら、私も出るよ。洋一は左手を怪我したことにして、私と連弾すればいいじゃん。そしたらお客さんも洋一のピアノ聞けるし、蓮真一門総出なら別の箔が付くでしょ」

洋一「……彩音」

蓮真「コンクールの舞台じゃねえんだぞ」

彩音「わかってるし。洋一より私の方が上手いって証明するいい機会だよ」

彩音、洋一を好戦的に見る。

洋一、呆れたように笑ってみせる。

洋一「上等だ。でもお前次の日、全国大会だぞ」

彩音「そっちはもちろん勝つ」

中原「弟子たちはこう言ってますが？」

蓮真、悩む顔。

洋一「先生」

彩音、蓮真を強い眼差しで見つめる。

蓮真「こんなつもりじゃなかったんだがな」

蓮真、観念したように

蓮真「……引退の告知はしない。その日は洋一のリサイタルだからな。あくまで俺のけじめだ。ピアノはその日を最後にする」

洋一、複雑な顔。

蓮真「お前たちは五曲仕上げろ。出来るな？」

彩音「誰の弟子だと思ってるの？」

蓮真「口が減らねえな。関係者には俺が連絡しておく」

蓮真、洋一に顔を向けて

蓮真「悪いな、洋一」

洋一「俺が望んだことですよ」

蓮真、肩を竦めてホールを出て行く。

中原「面白くなりそうだ」

中原、嬉々とした顔で蓮真の後を追う。

洋一「彩音、先生の家行くか。選曲しよう」

彩音「……これで先生のピアノが聞けたら、

ゆかりさんのシナリオ通りだよね」

洋一「かもな」

微笑み合う、彩音と洋一。

○有馬ホール・外観

海の近くにある巨大なホール施設。

着飾った蓮真、洋一、彩音の三人が並んで座るポスターが貼られている。

○同・コンサート会場

席が観客で埋め尽くされているなか、洋一と彩音が一つのグランドピアノで連弾している。

熱気のある演奏で曲を終えると、大きな拍手が沸き起こる。

○同・控え室

テレビ画面で会場を観ている蓮真と中原。

中原「さすがは世界のハスマの弟子たちだ。完成されている。休憩挟んで、先生の番ですよ」

タキシード姿の蓮真、コーヒーを飲ん

でいる。

中原「心境を伺っても？」

中原、手帳とペンを手に取る。

蓮真「……俺にとってピアノは、ただの逃げ道だったってお前は知ってるよな」

中原「ええ、島崎蓮真を取材し続けて三十年ですから」

蓮真「両親が死んでからの親戚の家暮らしは肩身が狭かったからよ。師匠に偶然出会って、偶然ピアノを教わってだった。別に音楽が好きってわけじゃなかったんだ」

中原「ピアノリストの神谷弘晃ですね。ゆかりさんの父親」

蓮真「お嬢様のくせに俺よりもがさつなところがあつてな。まあ、いい女だったよ」

蓮真、自嘲的に笑って

蓮真「この前、ガキに聞かれたろ。どうしてピアノを弾くのかって。本当の答えはこうだ。人に愛されたかったから。俺は誰でもいいから自分を見てほしかったんだ。

あのときふと、ゆかりはそんな俺が気に入らなかったんじゃないかって思ったよ」

中原「それが引退する理由というわけですか」

蓮真「いい歳だったしな。ただのきっかけさ。

まあでも、余生わずかでこんなに後悔することがあるとは思わなかったよ」

中原「長く生きているからこそとも言えるでしょう。いくつになっても人間ですから」

中原、立ち上がって

中原「ゆかりさんは、そんな人間らしい島崎

蓮真もちろんと見ていたと思いますよ」

蓮真「なあ、世界のハスマじゃない俺のピアノってなんだと思う？」

中原「それを見つけるためのラストリサイタルでしょう。期待していますよ」

中原、部屋を出て行く。

蓮真、一人になりコーヒーを飲み切つてから寝転がり天井を見上げて、目を閉じる。

○（夢の中）学校

木造の古い音楽室で、ピアノを弾いている蓮真（10）と背中合わせに座って歌っているゆかり（10）。

曲はキラキラ星。

ゆかり「キラキラ光る、夜空の星よ」

蓮真、ドヤ顔で

蓮真「どうだ？　上手いだろ」

ゆかり「ううん、下手」

蓮真「はあ？」

ゆかり「下手でいいよ。下手でもいいからさ」

ゆかりが何かを言うも声は聞こえない。

○元の有馬ホール・楽屋

ハッと目が覚める蓮真。

蓮真「なんて、言われたっけか」

扉のノック音が繰り返されている。

スタッフ「島崎さん！　島崎さん！」

洋一の声「ちよつと失礼します」

扉が開き、入ってくる洋一。左手には

包帯が巻かれている。

洋一「先生、何やってるんですか？！」

蓮真「うるせーな。なんだよ、慌てて」

洋一「あと五分で本番です！」

蓮真「あ？」

蓮真、時計を確認する。

蓮真「おいおい、なんで呼びに来ないんだよ」

洋一「返事するまで開けるなってルール作っ

たの先生でしょ。スタツフずつとノック

してたんですよ！ ああ着替えてくれて

て良かった。行きましょう」

洋一、蓮真の手を引っ張る。

蓮真「待て、洋一。小便してからだ」

洋一「そんな時間ないですって！」

蓮真、洋一に引っ張られる。

○同・舞台袖

やってくる、蓮真と洋一。周りのスタ

ッフが二人を見てホッとしている。

洋一「（小声で）すみません、遅れました」

蓮真、頭を軽く下げる。

洋一「じゃあ、俺は客席行きますから」

洋一、丁寧にお辞儀をして立ち去る。

蓮真「前立腺がボロいか。尿意との戦いだな」

蓮真、苦笑して舞台上へ歩く。

○同・特別室

観客席の最上にある個室。ガラス張りの窓から舞台上がよく見える。

椅子に座っている、彩音。

拍手とともに蓮真が舞台上に現われる。

同時に、洋一が入ってくる。

洋一「普通に寝てた」

彩音、呆れた顔。

洋一「あれ、中原さんは？」

彩音「一階の一番前。一等席で聴くってさ」

洋一、席に座る。

拍手に応え、一礼している蓮真。

彩音、洋一には目を向けずに

彩音「……あのさ」

洋一「ん？」

彩音「洋一には、ゆかりさんのこと話せばよかったって思ってる。だから……その、ごめんね」

洋一「いいよ。きっとゆかりさんは、俺なら大丈夫って思ってくれたんだろ」

お互いを見ずに笑い合う洋一と彩音。

彩音「先生の選曲、私、知らないんだけど」

洋一「俺も。教えてくれなかった」

舞台上の蓮真、ピアノ椅子に座り、鍵盤に触れてから演奏を始める。

彩音「……この曲」

洋一「ゴールドベルグ変奏曲か」

○同・舞台上

蓮真、渾身の演奏で客席の人すべてを魅了している。その表情は苦悶の表情。歯を食いしばり汗をかいている。

○同・客席

一番前の席で蓮真の演奏を放心状態で
聴いている、中原。

中原「……これがあの、島崎蓮真なのか」

中原、ペンと手帳を持った手は全く動
かずに、恍惚とした表情で蓮真のピ
アノに聞き惚れている。

○同・特別室

蓮真の演奏を聴いている、洋一と彩音。

彩音「相変わらず、すごいけど……なんか」

洋一「わかる。いつもと違うな。重みがある
というか、鬼気迫ってるというか」

洋一、考えて

洋一「あ」

彩音「なに？」

洋一「小便したいって言ってたけど」

沈黙する、洋一と彩音。

彩音「……嘘でしょ」

○同・舞台上

蓮真、汗だくで白目がむきそうな状態で演奏を続けている。

蓮真 M 「膀胱が、限界だ」

ゆかりの声「いいね」

蓮真、背中に寄りかかるものを感じる。
黒いグランドピアノに映るゆかりの
後ろ姿を確認する蓮真。

ゆかりの声「楽しそうじゃないか、蓮真」

蓮真、笑みを浮かべて演奏に力が入る。

○同・特別席

蓮真の演奏を見ている、洋一と彩音。

洋一「でも、なんか先生、楽しそうだな」

彩音「きつと、これだよ」

洋一「え？」

彩音「……ゆかりさんが好きだった、島崎蓮

真のピアノ」

彩音、泣きそうな顔。

○同・舞台上

蓮真、子どものように笑って演奏している。ゆっくりとしたテンポでやがて演奏が終わり、大歓声が起きる。

蓮真、礼をしないまま、その場で手を上げる。ホールが静まりかえり、再び演奏を開始する。

曲はアレンジした「きらきら星変奏曲」
蓮真、演奏をしながらグランドピアノ越しに後ろを見る。そこには誰もいない。

○同

舞台上で座っている蓮真、洋一、彩音の三人。客席には誰もいない静かな空間。

蓮真「……いやー、死ぬかと思ったぜ」

彩音「マジでトイレ行きたかったとか、ふざけすぎ」

蓮真「おいおい、本当にあの世に行く寸前だったんだからな」

洋一、左手の包帯を取りながら

洋一「でも先生、すっかりした顔してますよ」

彩音「用足したからでしょ」

洋一「そういう意味で言っただけだよ」

睨み合う、洋一と彩音。

蓮真、声を出して笑う。

蓮真「俺はずつとな、客に愛されたくてピアノを弾いてたんだ。どうすれば喜んでもらえるか。どんな曲が好まれるかってことばかり考えてた。だが、今日は逆だ。

自分のことしか考えてなかった」

洋一「どうでした？」

蓮真「楽しかった。ごちやごちや考えない人よがりのピアノだ。あの時の俺を見て笑ってたのはあいつだけだっただろうよ」

洋一「良い景色だったでしょうね。お互いに」

蓮真「島崎蓮真のピアノか。言ってくれるぜ」

彩音「気付いたきっかけがトイレ我慢とか、

ダサすぎ、品なさ過ぎ。じじい過ぎ」

蓮真「うるせーな、畳みかけてくんない」

洋一「でも中原さん、そんなこと露知らずに走って帰って行きましたよ。島崎蓮真の新しい扉が開いたああって」

彩音が吹き出して笑い、つられて全員で大笑いする。

蓮真「帰るか。彩音、明日優勝しないと破門だからな」

彩音「余裕。今ならなんでも出来そう」

蓮真「はっ、言ってる。メシ食いに行くぞ」

蓮真、歩き出す。

彩音、グランドピアノを一瞥して

彩音「ねえ、先生」

蓮真「ああ？」

彩音「ピアノ、本当にやめるの？」

蓮真、振り返り、洋一と彩音を見つめる。そのさらに奥、微笑んでいるゆかりの姿を見る。

蓮真「さて、どうだろうな」

蓮真、子どものようにニカッと笑う。

【了】